

## 事業活動報告 NO. 1

## ICTを活用した教育改善モデルの紹介

ICTを活用した教育改善モデルの研究成果を広く理解いただくため、本協会ホームページに平成24年度より掲載の大学教育への提言「未知の時代を切り拓く教育とICT活用」の2章に掲載の31分野に亘る教育改善モデルの考察結果を抜粋して紹介しています。

本章では、未来を切り拓く若者の育成を学士課程教育でどのように実現することが望ましいか、5年先を目指し専攻分野ごとに理想的な教育の仕組みを迫及した改善モデルの構想を提案することにした。構想の基調は、これまでの教員主導による授業の在り方を振り返り、学生が主体的に授業に取り組み、達成感や自信を培うことができるよう学生本位の学修の仕組み作りを目指した。そのため、提案している授業改善モデルの実現には、教員の個人的努力では対応できない教学・経営管理面での課題が山積しており、理事長、学長、学部長などのガバナンスの決断が求められる。このような背景から本章は、大学ガバナンスに関係される方々を中心に、学士力の実現に向けた教育現場からの課題を理解いただけるように努めた。

ここに紹介する教育改善モデルは、専攻分野における学士力の到達目標の一部を実現するための授業を構想したものであり全てではない。医学、歯学、薬学、看護学を除く27分野の学士力は本協会でも考察したものであり、医療系の学士力はモデル・コア・カリキュラムによった。本モデルの構成は、第1節が「分野別教育における学士力の考察」、第2節が「到達目標の一部を実現するための教育改善モデル」、第3節が「改善モデルに必要な教育力、FD活動と課題」とし、学士力から改善授業のモデル、教員の教育力、FD活動、大学の課題と体系的に考察を試みた。以下に、モデルの考察に際して特に配慮した点を掲げる。

- ① 就職活動による学修期間の短縮問題は、経済界の自主努力で改善されることが期待できるとした。
- ② ゆとり教育による学力低下問題は、平成24年度に中学校、25年度から高校で新学習指導要領に基づく課題探求型の学習と自己との関連付けの学習が徹底されることで、今後改善が期待できるとした。
- ③ 「未知の時代を切り拓く能力」を大学教育として提供できるようにすることが喫緊の課題であるとした。
- ④ 教養科目と専門科目、専門基礎と専門応用の科目の統合を促進するとともに、授業科目を体系化・総合化するなど、教員間で連携したチームによる学修を組織的に取り入れる必要があるとした。
- ⑤ 授業科目が多く事前・事後学修時間の確保が困難、統合授業など教員間での調整が必要とした。
- ⑥ 学生が自らの問題として授業を受けとめ主体的に学修する理想的な仕組みを創り出すことにした。
- ⑦ 学修成果を質保証するために卒業試験、卒業論文などの出口管理の厳格化、客観的な到達度評価の基準を作る必要があるとした。また、卒業までに学修成果を確実に修得できるよう学修ポートフォリオで不足している能力を洗い出し、大学が個々の学生に学修支援する仕組みを設けることが不可欠とした。
- ⑧ 本モデルは、「未知の時代を切り拓く能力」を大学教育として提供できるように、教育改善全般に亘り構想するものであり、教室での対面授業を基本とする中で必要に応じてICTを用いることにした。
- ⑨ 教育改善のイメージとしては、「教員の授業以外にICTを活用して社会や世界の学識者と協力して学べるようにする」、「グループによる学び合いを学修支援システムで展開する他、学修成果を学内外で発表・講評し、学修成果の振り返りを繰り返す中で学修の通用性を体験させる」、「学生目線でグループ学修の相談・助言を学内LAN上で支援する」、「不足する基礎知識を履修後も教員間の連携により学内LAN上で卒業までの期間を通じて定着・発展させる」、「学外教員による口頭試問の外部評価試験」などとした。
- ⑩ 教育改善モデルの実現性を高めるため、教員に期待される教育力を考察した。専攻分野における教員の姿勢、高度な知識、経験の視点から専門性を整理した上で、改善モデルに求められる特徴的な教育力を抽出し、その上で教育力を高めるFD活動とFD活動活性化に求められる大学の課題を整理した。

## 国際関係学分野

### 第1節 国際関係学教育における学士力の考察

国際関係学は、国境を越えて生起する社会現象を様々な領域から多面的に分析し、問題解決に向けグローバルな議論を喚起することを通じて、多元的価値の相互尊重に基づく共生及び人類の福祉に貢献することを使命としている。

グローバル社会、高度情報社会の進展に伴って地球的規模での情報共有が可能となり、環境問題、格差問題など多元的な課題解決への取り組みが求められ、政府の意思決定に依存するだけでなく、非政府行為主体の役割が問題解決に期待される時代となった。このために、国際関係学教育では、国際的な観点から政治学、経済学、社会学、法学、生物学、環境学などの学際性を背景とし、地球社会的に生起する事象・課題を対象としている。

このような背景から国際関係学教育は、いかに平和を維持するかを主題に主権国家間の関係の研究から出発し、科学技術の発達をもたらした影の部分も視野に入れ、政府間国際機構、民間組織などの多様な行為主体が取り上げられるようになり、地球的問題群の解決に向け、領域を拡大してきた。

そこで、国際関係学教育における学士力の到達目標として、以下の三点を考察した。

第一に国家・地域・国際組織、多国籍企業、NGOなどで構成される国際関係の基本的な仕組みとその背景を理解できること、第二に国際的な事象・課題などについて、国家、地域、国際社会の観点から調査し、多元的価値・複合的な視点から分析・説明できること、第三に国際社会と国家、個人などとの関係を認識し、地球的規模で人類共通の問題解決に向け、支え合うことができるとした。

#### 【到達目標】

#### 1 国家・地域・国際組織、多国籍企業、NGOなどで構成される国際関係の基本的な仕組みとその背景を理解できる。

ここでは、現代の国際社会における行為主体間の関係は同種間にとどまらず、異種の行為主体間にも形成されており、地球的問題群の解決にあたって大きな力となっていることの重要性に気付かせるため、国際社会を形成する行為主体はどのようなものがあるか、行為主体がいかなるルールに則って国際社会で活動しているか、その仕組みを理解させねばならない。そのために、単に主権国家のみならず新たに登場した国際組織、多国籍企業、さらに市民社会やNGOの研究を目指す。

#### 【コア・カリキュラムのイメージ】

国際関係論、国際関係史、国際政治学、国際法、国際経済学など

#### 【到達度】

- ① 国際社会における様々な行為主体の概念と定義を理解できる。
- ② 基本的な国際関係の事実を理解できる。
- ③ 国際政治・経済・社会・法における基本的原理を理解できる。

#### 【測定方法】

- ①から③は、客観式・論述式の筆記試験などにより確認する。

#### 【到達目標】

#### 2 国際的な事象・課題などについて、国家、地域、国際社会の観点から調査し、多元的価値・複合的な視点から分析・説明できる。

言語、宗教、歴史などによりアイデンティティは異なり、国益の設定も国家によって異なる。ここ

では、こうした多元的価値の存在を理解させるために、実際の調査や現実に触れることを積極的に奨励し、それぞれの視点から事象全体を考察・判断しうる力をつけさせなければならない。そのために、リアリティあるインパクトの強い授業を構成し、最新のデータの収集法と記述に触れさせ、理論モデルを比較・分析させる必要がある。

### 【コア・カリキュラムのイメージ】

国際社会学、国際組織論、国際開発学、平和学、地域研究、比較文化論、現代日本論、国益論、安全保障論、人間の安全保障論、ナショナリズム論、アイデンティティ論、ゲーム理論など

### 【到達度】

- ① 国際的問題あるいは課題の発見、把握のために適切な文献検索・資料を収集・整理できる。
- ② 正確な情報に基づいて科学的・客観的な手法で分析できる。
- ③ 多元的な価値に配慮し、理論の比較などによる複合的な視点に立って考察・評価できる。

### 【測定方法】

- ①と②は、文献研究、フィールドワーク、情報処理などを評価の観点とし、レポートなどにより確認する。
- ③は、ワークショップ、グループ討論、プレゼンテーションなどにより確認する。

### 【到達目標】

- 3 国際社会と国家、個人などとの関係を認識し、地球的規模で人類共通の問題解決に向け、支え合うことができる。**

ここでは、もはや地球的問題群は、一国規模では解決しえず、どれほど大きな問題であっても個人がこれに関わっていることを理解させ、幅広い国際協力の重要性と自らの問題として把握する態度と表現力を形成させねばならない。そのために、この問題に取り組む国際機構・市民社会やNGOなどの活動に触れることをフィールド・スタディー、インターンシップなどを通じて奨励する。その際に、問題解決に取り組む知識と方法の活用は必須であり、政策提言力を修練させ、発表の場を設定する必要がある。

### 【コア・カリキュラムのイメージ】

地球環境論、紛争解決論、平和構築論、国際協力論、異文化交流論、開発経済学、国際コミュニケーション、少人数演習、ゼミ、フィールド・スタディー、インターンシップなど

### 【到達度】

- ① 国際平和を連携・協調して実現する意義を説明できる。
- ② 地球的問題群を理解し、具体的な課題に対する政策提言ができる。
- ③ 政策提言を踏まえて議論し、自己修正できる。

### 【測定方法】

- ①から③は、論述式の筆記試験、レポート、グループ討論、ロールプレイングによるシミュレーション、卒業論文、卒論報告会、合評会などにより、確認する。

## 第2節 到達目標の一部を実現するための教育改善モデル

### 国際関係学教育における教育改善モデル【1】

上記到達目標の内、「国家・地域・国際組織、多国籍企業、NGOなどで構成される国際関係の基本的な仕組みとその背景を理解できる」を実現するための教育改善モデルを提案する。

## 1. 到達度として学生が身につける能力

- ① 国際社会における様々な行為主体の概念と定義を理解できる。
- ② 基本的な国際関係の事実を理解できる。
- ③ 国際政治・経済・社会・法における基本的原理を理解できる。

## 2. 改善モデルの授業デザイン

### 2.1 授業のねらい

エネルギーや環境などの問題一つを取り上げても自国だけで問題解決できない規模に拡大し、国家間での協調が必要とされる時代が変わってきた。このような中で国際社会と自己との関連付けを学生一人ひとりが認識し、理解することが基本的な資質として求められている。

ここで提案する授業は、国際社会の基礎的概念・枠組を理解させ、学びの動機付けを行うために身近なテーマから出発し、どのように国際社会と関わりを持っているかを理解し、積極的に関与する姿勢を身につけさせることを目的としている。

### 2.2 授業の仕組み

ここでは、初年次での教育を想定しているが、学びが4年間を通じて定着できるように初年次教育終了後もネット上で学生の理解度に応じた学修の場を提供することを前提としている。そのために、グループによる学修を基本にして「受講」という消極的な受け身の学びから協働で自ら学ぶ姿勢を身につけさせ、バーチャルなグループでの4年間の学びを通じて発展的な学修ができるような仕組みを形成する。

その上で、上級学年生をはじめ担当教員がネット上で学生とコミュニケーションを行い、フォローアップできるようにきめの細かい学修支援の体制が必要である（図）。

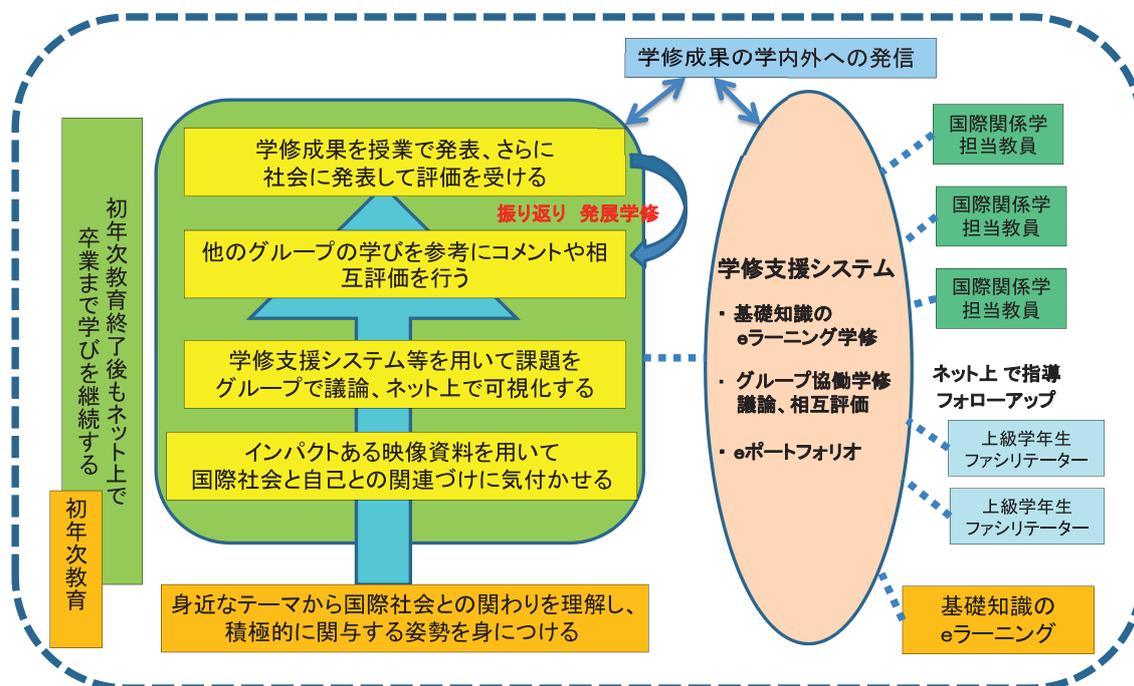


図 授業の仕組み

### 2.3 授業にICTを活用したシナリオ

以下に授業シナリオの一例を紹介する。

- ① インパクトのある映像資料を視聴させて、国際社会と自己との関連付けを気付かせる。

- ② 課題について学修支援システムや掲示板なども使用して授業時間外も含めてグループ討論を行い、グループ内外での議論の様子を可視化する。
- ③ 他のグループの学びを参考にするとともに、これに対するコメントや相互評価を行う。
- ④ 各グループは授業において成果の報告を行うとともに、学生の理解を得て、学びの成果をネットを通じて社会に発表し、社会からの評価を受け、それを踏まえてさらに発展的な学修を行う。

## 2.4 授業にICTを活用した学修内容・方法

以下に学修内容・方法の一例を紹介する。

- ① 国際社会の特質を理解した上で、多面的に情報を集めるために複数の機関・集団・市民からの情報が得られるようなネットワークを学びの課程の中で構築する。
- ② 国際社会で起きている様々な事象について、「毎日の暮らしから考える国際社会」をテーマとして、関連する映像を視聴し、それを踏まえて論点整理をネット上に展開させグループ形成を行う。
- ③ その上で、国際社会の実態を現実感覚として受け止められるようにするため、現地の最新情報について様々な観点から生の情報をネットで収集し、その情報の整理・分析をグループで行い、国際社会に対する自己との関連付けを意識させる。
- ④ グループで議論した内容を学内のネット上に掲載し、国際関係学だけではなく他の分野の学生も対象に学びの成果について意見や討論を行わせる。

## 2.5 授業にICTを活用して期待される効果

- ① グループでの学びや学修支援システム、掲示板などにより、受け身の学びから協働して自ら学ぶ姿勢を身につけさせることができる。
- ② ネットによる現地からの情報収集などを通じて、国際社会の問題を自らの関心と関連付けさせることができる。
- ③ 課題の探求を通して、国際社会と日本との関連付けの重要性を気付かせることができる。

## 2.6 授業にICTを活用した学修環境

- ① 国際社会とリアルな情報交流が可能となるような情報の受発信の仕組み、例えば教育クラウドと連結した高機能携帯端末などの整備が前提となる。
- ② 国際社会とリアルな情報交流を行うための多言語自動翻訳システムの整備が必要になる。
- ③ 学修及びシミュレーションを支援する上級学年生によるファシリテーター\*の制度化が必要になる。
- ④ 教員同士の連携を図るためのコミュニケーションシステムが必要になる。

## 3. 改善モデルの授業の点検・評価・改善

この授業の点検・評価は、教員の評価シート、学生の相互評価、学生のポートフォリオを用いて4年間を通じたカリキュラムフローの中で行う。その上で、教員同士がネット上で連携し、学生に不足している能力をネット上の補完授業として提供し、到達度をネット上の面接試験で確認する。

## 4. 改善モデルの授業運営上の問題及び課題

- ① 上級学年生による学修支援を図るためのファシリテーターを大学ガバナンスの一要素として、構築しておく必要がある。
- ② グループによる協働学修を基本にしてバーチャルなグループでの4年間の学びを通じて発展的な学修ができるようにするため、他教科の教員と連携したeラーニングなどによる振り返りの仕組みづくりが必要である。

## 国際関係学教育における教育改善モデル【2】

上記到達目標の内、「国際社会と国家、個人などとの関係を認識し、地球的規模で人類共通の問題解決に向け、支え合うことができる」を実現するための教育改善モデルを提案する。

### 1. 到達度として学生が身につける能力

- ① 国際平和を連携・協調して実現する意義を説明できる。
- ② 地球的問題群を理解し、具体的な課題に対する政策提言ができる。
- ③ 政策提言を踏まえて議論し、自己修正できる。

### 2. 改善モデルの授業デザイン

#### 2.1 授業のねらい

現代国際社会の運営・ガバナンス・参加者の関係、決定の方法・仕組みなどの構造、多様な行為主体である国家、国際機関、NGOなどのアクターの役割などについて、個々の関連科目から一定の知識を得ているが、学びの動機付けに基づく関連付けがなされてこなかったことから、どのような態度や行動をとれば良いかを身につけることが困難であった。

ここで提案する授業は、こうした到達度を振り返り、ここまでの学びの統合を図るために国際社会を再現するシミュレーションを展開した実習的な授業の一例を示すもので、4年間の学修成果を地球市民として世界に向けて政策提言することを目標とする。

#### 2.2 授業の仕組み

ここでは、卒業するまでの学修期間を通じた授業改善モデルであり、ある特定年次をイメージしたモデルではない。この授業を実現するためには様々な概念を再確認する教員同士の協働作業が前提となる。ここでなされる政策提言の解は必ずしも教員のイメージするものと同一である必要はない。学生一人ひとりが地球市民として、世界に向けて発信し、その批判、合意を得て学びの社会的通用性を実感させることにある(図)。

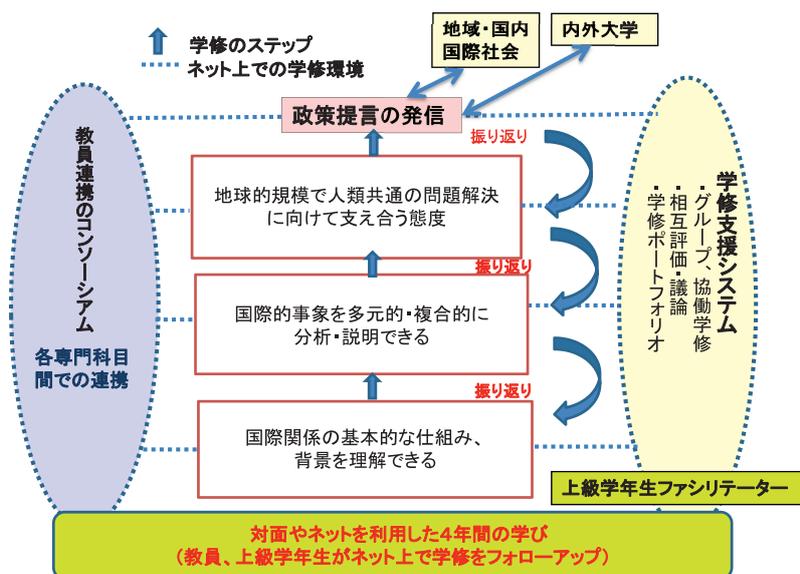


図 授業の仕組み

#### 2.3 授業にICTを活用したシナリオ

以下に授業シナリオの一例を紹介する。

- ① 現代国際社会の運営・ガバナンス・参加者の関係、決定の方法・仕組みなどの構造、多様な行為主体である国家、国際機関、NGOなどのアクターの役割についての学修が身につけているか否かを学修ポートフォリオで確認させ、その上で、不十分な学生にはネット上に再学修のためのプラットフォームを構築しておく必要がある。
- ② 問題を取り巻く具体的な国際社会の状況を知るために、情報を取得・共有し、論争点を議論し

て政策を発信するためにICTを最大限に活用する。

- ③ 学びの結果を振り返りさせるために、ネットを通じて世界の学識者、学生、社会人などとのフォーラムを形成し、世界市民としての関与を体現させる。

## 2.4 授業にICTを活用した学修内容・方法

以下に学修内容・方法の一例を紹介する。

- ① 地球的問題群、あるいは、ホットなトピックなどから、一つないしは二つのテーマを選定し、学修グループを構成する。この過程で、今、世界が抱える問題は何か、その本質は何かを、能動的かつ協働的に学ばせる。
- ② グループ内で活発に行える学修支援システムを駆使して予習・復習を徹底させ、関心の深いテーマについて、グループ間で対面やネットを通じて議論させ、学修意欲を喚起する。
- ③ 次に、それがどのように国家や地域、国際社会と関わりをもっているのかという視点から、学修者の規模に応じて、適度な数のアクターを選び出す。この過程で、問題の背景や事件の詳細な構造を自然に学んでいく。
- ④ グループの協働作業で政策提言をまとめ、ネットを通じて内外に発信する。同様の試みを複数の大学間で同時に行い、学修者間で比較、検討できるシステムを準備する。
- ⑤ こうして身につけた知識をもとにICT環境を利用して、国際社会をテーマにしたシミュレーションに参加し、必要とされる知識を活用する中で振り返りを行わせる。また、必要に応じて現地のスタディツアーを実施する。
- ⑥ ICT環境を駆使して実際に国際社会のシミュレーションを行い、問題解決のための交渉や国際会議を模擬的に試みる。この作業があるために学修者は、事前学修を怠ることができない。
- ⑦ シミュレーションの結果を書かせ、それをもとに議論を行い、政策提言レポートを提出させる。
- ⑧ 学修到達度の評価は、グループや協働での学修の中で政策提言にどう関与したかを学修ポートフォリオにより記述させ、学修者間による相互評価を行う。さらに、政策提言を世界に向けて発信し、その批判、合意を評価に加える。

## 2.5 授業にICTを活用して期待される効果

- ① 教員と学生間、学生間、教員間のグローバルな情報共有とコミュニケーションが格段に深化する。
- ② 世界中の大学間や国際社会とのコミュニケーションが拡大され、学びがグローバル化する。
- ③ 記録性と閲覧性が拡大することによって、学修の振り返りが徹底できる。
- ④ 多様な視点からの情報収集・発信・学びが可能になり、国際社会と自己との関連付けがより適切になされる。

## 2.6 授業にICTを活用した学修環境

- ① 多言語の自動翻訳システムを含む教育クラウドの形成が必要になる。
- ② 学修及びシミュレーションを支援する上級学年生によるファシリテーターの制度化が必要になる。
- ③ 教員同士の連携を図るためのコミュニケーションシステムが必要になる。

## 3. 改善モデルの授業の点検・評価・改善

この授業の点検・評価は、教員の評価シート、学生の相互評価、学生のポートフォリオを用いて4年間を通じたカリキュラムフローの中で行う。その上で、大学や国境を越えたネット上の政策提言コンテストを通じて、国際社会と自己との関連付けを確認させる。このことを通じて到達度の成否を確認し、大学や国際社会との連携を踏まえたカリキュラムの見直しを図る。

#### 4. 改善モデルの授業運営上の問題及び課題

- ① 上級学年生による学修支援を図るためのファシリテーターを大学ガバナンスの一要素として、構築しておく必要がある。
- ② 専門や国境を超えた教員同士の協働作業の仕組みを機能させるために、学内はもとより大学を超えた連携保障システムの形成が不可欠となる。

### 第3節 改善モデルに必要な教育力、FD活動と課題

#### 【1】国際関係学教員に期待される専門性

- ① 人類の福祉を希求するための倫理観、使命感を有していること。
- ② 多元的な価値に配慮し、複合的視点に立って、世界の現状と課題について科学的に分析し、解決策を示せること。
- ③ 世界の潮流を把握し、かつ、我が国独自の文化・哲学的基盤に通じていること。
- ④ 世界と個人の結び付きを気付かせ、興味・関心を抱かせ、主体的に取り組ませられること。
- ⑤ ICTなどの教育技法を駆使して、より参加型の教育ができること。

#### 【2】教育改善モデルに求められる教育力

- ① 幅広い視野から主体的な学修の重要性を気付かせられること。
- ② 知を創発させる協働の場を造り、地球社会に対するシンクタンクとしてのミッションを果たすことを示せること。
- ③ 世界の学識者、専門家、研究者、教員などの協力を結び付け、コーディネートできること。
- ④ インパクトのある具体的な研究成果としての目標を学生に提示・説明できること。
- ⑤ ICTによる情報とフィールドでの経験情報とを整理統合して、常に活用し得る状態を心掛けること。
- ⑥ ICTの有効性を理解し、ネット上の討論ができること。

#### 【3】教育力を高めるためのFD活動と大学としての課題

##### (1) FD活動

- ① 学生にリアリティを認識させるためにフィールドワークの体験情報や実務経験の情報を公開し学生に自らの問題として受け止めさせる仕組みを日常的に整える必要がある。
- ② 地域社会から地球社会にまで至る諸問題をテーマに教職員、学生、実務家が地球市民の立場で検討する対話集会を設け、それらの諸問題にどのように関与すべきか考えさせる機会をつくる必要がある。
- ③ 大学が主宰して現実に地球社会で生起している紛争解決の場を実際に設ける必要がある。

##### (2) 大学としての課題

- ① FDの基盤情報として授業の録画、教材コンテンツ、ネット上のディスカッションなどをアーカイブ化し、共有可能なプラットフォームを整備する必要がある。
- ② ICTを用いた教育手法を支援する組織と環境を大学として統合的に整備する必要がある。
- ③ 学内外の関連分野教員や世界の学識者、専門家などと連携して教育を進めるための制度の整備及び財政的な支援を行う必要がある。
- ④ 世界を視野に入れた教育の質保証を持続的に行う責任がある。

# 被服学分野

## 第1節 被服学教育における学士力の考察

被服は、気候、風土、地理的条件に左右されながらもそれぞれの時代、社会のニーズにより変化し、創意工夫され今日に至っている。人間生活に最も身近な存在としての被服は、身体の保護、自己表現手段、コミュニケーション手段など多様な役割を通して、物質的な豊かさに加えて精神的な豊かさや生活の質の向上に貢献している。豊かな社会を築くために「ヒト・モノ・環境」などの関係性に配慮して、被服の様々な役割と在り方を科学的・体系的に探究することが被服学の目標である。

このような背景から被服学教育は、個からグローバルへと進展している現代社会における個人の価値観やニーズの変化を踏まえて、より良い生活に寄与できることを目指している。

そのためには、社会・産業・環境などの観点から衣生活を総合的に考え、実践できる能力を培い、持続可能な社会のイノベーションに取り組める力を養う必要がある。

そこで、被服学教育における学士力の到達目標として、以下の五点を考察した。

第一に被服の歴史・文化や被服の社会的、保健衛生的役割を理解し、被服の着用などによるイメージを思考することができること、第二に人体を把握し、人体と被服との関係や被服構造を知り、被服の構成力を身につけ被服パターン設計に活用できること、第三に被服材料の特性を理解し、デザイン考案や被服設計への応用と具体的造形表現ができること、第四に繊維、アパレル産業における生産、流通の仕組みと企画設計までのプロセスを理解できること、第五に被服の生産、流通、消費における環境問題などを理解し、未来に向けたより質の高い衣生活を提案できることとした。

### 【到達目標】

#### 1 被服の歴史・文化や被服の社会的、保健衛生的役割を理解し、被服の着用などによるイメージを思考することができる。

ここでは、被服が持つ多様な役割を理解させるため、科学的、社会的、保健衛生的観点から総合的に考察する能力を身につけさせねばならない。そのためには、被服の歴史や文化的背景を理解させた上で、自己表現や他者との関係の調和、精神的なやすらぎなどを総合的に捉えられることを目指す。

### 【コア・カリキュラムのイメージ】

服飾文化史、現代ファッションデザイン、ファッションイメージ表現、被服心理、基礎造形など

### 【到達度】

- ① 被服の歴史・文化・役割を理解し、被服の社会的、保健衛生的役割を論理的に説明できる。
- ② 被服の着用イメージや感性の表現ができる基礎能力を身につけている。

### 【測定方法】

- ①は、レポート、筆記試験などにより確認する。
- ②は、作品を通して感性や技術を確認する。

### 【到達目標】

#### 2 人体を把握し、人体と被服との関係や被服構造を知り、被服の構成力を身につけ被服パターン設計に活用できる。

ここでは、快適な被服を設計するために、人体に適合する被服構成の知識と技術を身につけさせねばならない。そのためには、人体の構造・動作・生理機能や人体と被服との関係を理解させ、人体計測法、被服設計のための作図法や基本的な縫製技術の修得を目指す。

### 【コア・カリキュラムのイメージ】

被服構成学、被服人間工学、被服衛生学、パターン設計、縫製など

#### 【到達度】

- ① 被服構成の基礎を理解して、被服設計ができる。
- ② 人体の構造と機能を理解して、被服形態との関連を説明し、機能評価ができる。
- ③ 縫製の基礎的な知識と技術を身につけ、被服造形ができる。

#### 【測定方法】

- ①は、筆記試験及び実技試験などにより確認する。
- ②は、レポート、筆記試験などにより確認する。
- ③は、筆記試験及び作品などにより確認する。

#### 【到達目標】

### 3 被服材料の特性を理解し、デザイン考案や被服設計への応用と具体的造形表現ができる。

ここでは、被服材料の種類と外観・着心地・扱いやすさなどの物理化学的特性が、被服の造形性・衛生的機能及び管理保存方法に大きく影響することを理解させねばならない。そのためには、材料物性の基本的な実験法と解析評価法を修得させ、新しい被服材料の動向を踏まえて、材料特性を活かした設計・製作やファッションプレゼンテーションなどの着装表現ができることを目指す。

### 【コア・カリキュラムのイメージ】

被服材料、テキスタイルデザイン、アパレル設計、色彩設計など

#### 【到達度】

- ① 被服材料の特性を理解できる。
- ② 被服材料の特性を活かしたアパレルの設計ができる。
- ③ ファッションプレゼンテーションができる。

#### 【測定方法】

- ①と②は、筆記試験、レポートなどにより確認する。
- ③は、作品制作やプレゼンテーションなどにより確認する。

#### 【到達目標】

### 4 繊維、アパレル産業における生産、流通の仕組みと企画設計までのプロセスを理解できる。

ここでは、合理的で豊かな衣生活を生産者側と消費者側の視点で考えられるようにするため、アパレル産業における生産、流通、販売の仕組みや製作の意図を理解させねばならない。そのために、アパレル商品の企画過程を分析して、情報収集、コンセプト策定、デザイン化に取り組ませる。

### 【コア・カリキュラムのイメージ】

アパレル生産、アパレル企画、マーケティング、リテーリング、ビジュアルマーチャндаイジング、アパレル産業構造・流通など

#### 【到達度】

- ① アパレル産業の構造と生産のプロセスを理解できる。
- ② マーケティング手法について理解し、市場調査・分析の方法を活用できる。
- ③ アパレル製品の情報収集、コンセプトの策定、デザインを考えることができる。

#### 【測定方法】

- ①は、筆記試験などにより確認する。
- ②は、筆記試験、レポートなどにより確認する。

③は、レポートなどにより確認する。

### 【到達目標】

**5 被服の生産、流通、消費における環境問題などを理解し、未来に向けたより質の高い衣生活を提案できる。**

ここでは、将来の衣生活が環境に配慮した豊かなものとなるよう、自ら判断できるようにさせねばならない。アパレル産業においても生産、流通、消費のすべての面で環境に配慮した循環型システムへの移行を考える必要がある。そのためには、生分解性素材の開発、長期的な使用を見据えた資源の有効利用の検討、消費者による3R (Reduce, Reuse, Recycle) の実施などを十分に把握・理解させる必要がある。

### 【コア・カリキュラムのイメージ】

アパレル管理、アパレル環境科学、アパレル消費科学、ライフスタイルなど

### 【到達度】

- ① 環境や社会への影響などを考えて、被服の選択、維持管理の方法を理解できる。
- ② 省資源のライフスタイルを意識した衣生活の向上を考え、行動することができる。

### 【測定方法】

- ①と②は、レポート、筆記試験などにより確認する。

## 第2節 到達目標の一部を実現するための教育改善モデル

### 被服学教育における教育改善モデル【1】

上記到達目標の内、「被服材料の特性を理解し、デザイン考案や被服設計への応用と具体的造形表現ができる」を実現するための教育改善モデルを提案する。

#### 1. 到達度として学生が身につける能力

- ① 被服材料の特性を理解できる。
- ② 被服材料の特性を活かしたアパレルの設計ができる。
- ③ ファッションプレゼンテーションができる。

#### 2. 改善モデルの授業デザイン

##### 2.1 授業のねらい

従来、被服の材料・デザイン・設計に関する授業は個別に行われることが多く、材料特性を活かしたデザインの決定、あるいはデザインに適した材料選択という被服製作のための相互的アプローチに対応できる能力を高める学修の場が提供されてこなかった。

ここで提案する授業は、関連科目間の連携による統合授業により、被服材料特性と被服のデザインや設計との関連性を理解させ、実践的に活用できる力を身につけさせることを目指す。

##### 2.2 授業の仕組み

ここでは、2年次までのカリキュラムで基礎的な被服材料・デザイン・設計の知識や技術を修得していることを前提とするが、能力が身につけていない場合はeラーニングで補完できる仕組みを構築しておく。

関連科目間の連携による材料・デザイン・設計の流れを体現する実験・実習を行うために、教員同士が意識合わせをして協働する場を設けておく。実践力のある教員を中心に、被服デザイン、被

服材料、被服設計に関連する担当教員が共通理解のもとに協働授業を行う。到達度の確認は、学修成果の評価に加えて、外部評価により行う。

### 2.3 授業にICTを活用したシナリオ

以下に授業シナリオの一例を紹介する（図1、図2）。

- ① 被服設計におけるデザインと被服材料の造形特性との関連を実際の商品や作品から考察させる。
- ② ネット、文献、市場調査などによって被服材料の種類を調査し、物理特性を考えさせる。
- ③ 衣服の種類とデザインに適した材料特性を考えさせる。
- ④ 制作課題を与える中で、造形特性や材料特性を自ら考え、製作、コーディネートさせる。
- ⑤ 作品を発表させる中で振り返りを行わせ、評価を受ける。
- ⑥ 学修過程を学修ポートフォリオに記録させるとともに、多元的な評価結果をデータベース化し、発展的な授業改善につなげる



図1 市場調査で集めた画像



ストレッチウール

シーチング

別珍

ギャバジン

ストレッチサテン

図2 同パターン同一ボディ異素材によるドレープ性サンプル

### 2.4 授業にICTを活用した学修内容・方法

以下に学修内容・方法の一例を紹介する（図3、図4）。

- ① 被服設計はパターンのみならず布の特性が大きく関わることを理解させるために、布の特性を活かした作品や商品を動画や静止画で紹介し、使用されている布の材料特性をグループで調べさせる。
- ② 雑誌や店舗観察から集めた布の特徴を形容詞で表現し、その材料特性を考え、データベース化させる。
- ③ グループで衣服の種類ごとに用いられている布やその材料特性、使われ方をまとめさせ、学修支援システムに掲載させる。
- ④ 材料特性を活かしたデザインを考案させ、適切な布を選択し、材料特性を測定した上で製作させる。
- ⑤ 各種衣服に用いられている布の種類と材料特性、地の目方向など、衣服の製作意図と被服材料との関係、製作意図が達成されたかどうかをグループで相互評価させる。
- ⑥ 特徴のある作品をネットに掲載し、他大学や企業などの多面的な外部評価をネット上で受けた結果を踏まえて、創発的な授業に結び付ける。



図3 素材特性を調べる



図4 ハートループ法で剛軟度測定

## 2.5 授業にICTを活用して期待される効果

- ① ネットを通じて世界中の衣服材料及びアパレル製品の情報を活用し、材料特性とデザインの関係を理解させることができる。
- ② ネット上のプラットフォームを通じて関連科目の教員同士の意識合わせと協働が可能になる。
- ③ 他大学や産業界とのコラボレーションによる外部評価を受けることで、学びの通用性を確認し、創作意欲を高めることができる。

## 2.6 授業にICTを活用した学修環境

- ① 関連科目の教員同士が協働するプラットフォームが必要になる。
- ② 他大学や産業界とのコラボレーションを行うクラウド環境が必要になる。
- ③ グループや協働での学修を支援するために、上級学年生によるファシリテーターが必要になる。

## 3. 改善モデルの授業の点検・評価・改善

この授業モデルを点検・評価・改善するためには、授業期間中に学内担当教員が材料特性を活かしたデザインの決定、あるいはデザインに適した材料選択、衣服制作などの到達度の確認を行い、ポータルサイトに公開して情報を共有し、改善に向けた対策を検討する。必要に応じて、教員、専門家などを含む外部者を交えて意見交流する。

## 4. 改善モデルの授業運営上の問題及び課題

- ① 大学がバナンスで関連科目の教員同士が協働する仕組みを構築することが必要である。
- ② 大学間や産業界との連携の仕組みを組織的に構築する必要がある。
- ③ 上級学年生や大学院生による学修支援を組織的に行う仕組みとして、学内雇用制度を整備する必要がある。
- ④ 学生の作品の著作権保護を大学としてシステム化する必要がある。

## 被服学教育における教育改善モデル【2】

上記到達目標の内、「繊維、アパレル産業における生産、流通の仕組みと企画設計までのプロセスを理解できる」を実現するための教育改善モデルを提案する。

### 1. 到達度として学生が身につける能力

- ① アパレル産業の構造と生産のプロセスを理解できる。
- ② マーケティング手法について理解し、市場調査・分析の方法を活用できる。

- ③ アパレル製品の情報収集、コンセプトの策定、デザインを考えることができる。

## 2. 改善モデルの授業デザイン

### 2.1 授業のねらい

現在のアパレル産業の構造と生産のプロセスを把握し、社会との関連の中でアパレル製品の在り方を考えるには、実際の社会でどのように商品化され、生産されているのかを知ることが重要である。しかし、現状では実際を見ることなく、知識の伝達に終始している。

ここで提案する授業は、産業界との情報交換と実体験を通じた産学連携の授業を展開し、実践的な商品企画能力の開発を目指す。

### 2.2 授業の仕組み

ここでは、2年次までのカリキュラムで基礎的な被服材料・デザイン・設計・人体の生理や心理などの知識や技術を修得していることを前提とするが、能力が身につけていない場合はeラーニングで補完できる仕組みを構築しておく。産学連携を行うために、大学と産業界が共通理解を深め、目標達成のために役割分担を意識合わせし、協働する仕組みを作ることを前提とする。その際、教員同士が意識合わせをして協働する場を設けておく。

### 2.3 授業にICTを活用したシナリオ

以下に授業シナリオの一例を紹介する。

- ① 産業現場のフィールドワークを実施することで、現場の生産プロセスを把握・理解させる（図1）。
- ② 産業データベースなどにより情報収集やマーケットリサーチを行い、コンセプトやデザインの傾向を理解させる。
- ③ テーマに沿ってデザイン考案させる。
- ④ ブランド制作に適切なものを選出して、グループで議論させ、コンセプトを明確にし、プロセスを共有化させる（図2）。



図1 産業現場のフィールドワーク



例 ターゲット：20代前半 カッコいいカジュアルなメンズ  
 コンセプト：いろいろな顔を持つ人気タレントをイメージモデルとして、それぞれの表情にふさわしい、カッコイイスタイルの提案  
 キーワード：おじかわ、さわやか、アウトドア、かっちりフォーマル

図2 コンセプト・ターゲットを共有化、ブランドデザイン提案

- ⑤ デザインの修正を繰り返し、ブランドコンセプトを確定し最終デザインを確認させる。
- ⑥ 制作の過程を整理するために学修ポートフォリオの形でファイリングし、企画書を制作させる（図3）。
- ⑦ 学修成果として作成したブランドデザインをプレゼンテーションし、各グループ間で相互評価を行うとともにネットを通じて学内外に公開し、産地・企業を含めた評価を受ける（図4）。



図3 デザインのファイリング、企画書制作



図4 ブランドデザインをプレゼンテーション

## 2.4 授業にICTを活用した学修内容・方法

以下に学修内容・方法の一例を紹介する。

- ① 事前にネット上で産地や企業をリサーチさせ、フィールドワークすべき内容を絞り込ませる。
- ② 産地見学を行い、その結果をレポートさせ、学修支援システム上に掲載し、情報共有させる。
- ③ バーチャルカンパニーを設立させ、役割分担にしたがってブランドプランニングをさせる。
- ④ グループ間でプリテストを行い、産地・企業に向けてブランド提案させ、商品化を目指す。
- ⑤ 学修過程を学修ポートフォリオに記録させるとともに、評価結果をデータベース化し、発展的な授業改善につなげる。

## 2.5 授業にICTを活用して期待される効果

- ① バーチャルカンパニーをネット上に設立し、商品化を目指すことで学生のモチベーションの向上が図れる。
- ② 学びをプラットフォーム化することで、教員-学生-産地・企業との連携をリアルタイムで行える。
- ③ 学修成果をデータベース化することで授業改善を促すとともに、社会と呼应した企画に活かすことができる。

## 2.6 授業にICTを活用した学修環境

- ① 関連科目の教員同士が協働するプラットフォームが必要になる。
- ② 他大学や産地・企業とのコラボレーションを行うクラウド環境が必要になる。
- ③ 学修過程や学修成果をデータベース化し、管理・共有できる仕組みが必要になる。

## 3. 改善モデルの授業の点検・評価・改善

この授業モデルを点検・評価・改善するためには、授業期間中に学内担当教員がアパレル産業の構造と生産プロセス、マーケティング手法、アパレル製品の企画などの到達度の確認を行い、ポータルサイトに公開して情報を共有し、改善に向けた対策を検討する。さらに、産業界の専門家などを含む外部者を交えて意見交流する。

## 4. 改善モデルの授業運営上の問題及び課題

- ① 大学ガバナンスで関連科目の教員同士が協働する仕組みを構築することが必要である。
- ② 大学間や産業界との連携の仕組みを組織的に構築する必要がある。
- ③ 学生の作品の著作権保護を大学としてシステム化する必要がある。

## 第3節 改善モデルに必要な教育力、FD活動と課題

### 【1】被服学教員に期待される専門性

- ① 生活を豊かにする衣生活の重要性を伝える責任感と使命感を有していること。
- ② 我が国及び世界の現状について、総合的に考えられること。
- ③ 被服の課題を通じて科学的な根拠に基づいてイノベーションできること。
- ④ 教員間、産業社会との連携をコーディネートできること。
- ⑤ ICTなどの教育技法を駆使して、実践的な教育指導ができること。

### 【2】教育改善モデルに求められる教育力

- ① 授業のカリキュラム上の位置付けを教員間で共有し、シラバスの調整を行い、カリキュラムポリシーに沿った授業を実施できること。
- ② グループワークを通じて体現的な実験・実習を展開できること。
- ③ 被服デザイン、被服材料、被服設計の専門教員と協働する中で、人体と被服との関連付けを実践的に考えさせられること。
- ④ 産業界との情報交換と実体験を通じた産学連携の授業を展開することができる。
- ⑤ 学修過程を学修ポートフォリオ化し、成果をネットを通じて学内外にプレゼンテーションさせられること。
- ⑥ 学内外の評価結果をデータベース化して振り返りを行わせ、改善させられること。

### 【3】教育力を高めるためのFD活動と大学としての課題

#### (1) FD活動

- ① カリキュラムの全体像と当該授業の位置付け及び授業内容と教育方針との点検・評価の確認を組織的かつ継続的に行う必要がある。
- ② 関連分野の研究報告会及び授業参観などに積極的に参加する機会を設け、教員間の連携を強化する場を継続的に設定する必要がある。
- ③ グループや協働での学修を促進する指導法のワークショップを組織的に行う必要がある。
- ④ 産地・企業の研究報告会に積極的に参加し、専門科目を担当する教員と企業関係者との連携を図り、社会の状況を授業に活かす必要がある。
- ⑤ 学内外の評価による振り返りを行わせる指導法について、専門家を招くなどの研究会を実施する必要がある。

#### (2) 大学としての課題

- ① 授業の録画、教材コンテンツ、ネット上のディスカッションを可能にするため、学内外の多様なコンテンツをアーカイブする必要がある。
- ② 学修ポートフォリオを活用した学修支援を実効あるものとするために、大学として組織的な取り組みと支援が必要である。
- ③ 学内外の関連分野の教員や社会の専門家などから協力を得るために、連携の呼びかけ、制度の整備及び財政的な支援を行う必要がある。
- ④ ICTを活用した教育方法を支援する組織と環境を大学として整備する必要がある。
- ⑤ 学務系職員、ICT技術系職員の教育支援能力の開発と教員との連携の強化への支援が必要である。
- ⑥ 世界を視野に入れた教育の質保証を持続的に行う責任がある。